

第4章
◎

家庭薬の現代と未来

家庭薬というと「懐かしさ」「伝統」など、古めかしい言葉とイメージが結びつく。

だが、時代をどんなにさかのぼろうとも、

その時代時代の「今」のなかで家庭薬は生き、「今」への思いを積み重ね、現代があるのだ。

今、世の中のために。今、家族のために。今、恋人のために。

そして、家庭薬は今、未来のために。

本章のコラムは、牧田潔明氏（わかもと製薬株式会社代表取締役会長）、堀正典氏（救心製薬株式会社代表取締役社長）、柴田仁氏（大幸薬品株式会社代表取締役社長）、藤井隆太氏（株式会社龍角散代表取締役社長）への取材により構成しました。



柴田 仁(しばた・ひとし)

大幸薬品株式会社代表取締役社長。1951年生まれ。甲南大学卒業後、日本アイ・ピー・エム株式会社入社。77年に大幸薬品入社。取締役社長室長兼電算室長、取締役副社長を経て、87年から現職。大阪家庭薬協会会長。趣味はゴルフとモノ作り。



牧田 潔明(まきた・きよあき)

わかもと製薬株式会社代表取締役会長。1933年生まれ。学習院大学卒業後、63年に入社。2002年から現職。全国家庭薬協議会会長。趣味は写真。



藤井 隆太(ふじい・りゅうた)

株式会社龍角散代表取締役社長。1959年生まれ。桐朋学園大学卒業後、小林製薬株式会社、三菱化成株式会社を経て、94年に龍角散に入社。95年から現職。東京都家庭薬工業協同組合情報協業化委員会委員長。趣味は音楽教育。



堀 正典(ほり・まさのり)

救心製薬株式会社代表取締役社長。1949年生まれ。慶應義塾大学卒業後、エーザイ株式会社を経て、82年に救心製薬に入社。2000年から現職。東京都家庭薬工業協同組合理事。趣味は謡曲、書道、ネイチャーフォトなど。

家庭薬ってなんだろう

Column①

現代人は「家庭薬」という言葉を聞いて、どのようなイメージを持つのであろう。ひと昔前であったならば、大家族の家庭のなかに薬箱が常備されていて、ちょっとしたお腹が痛い時や熱が出そうな時、薬箱をのぞきみると、いつもそこにある常備薬という絵がすんなりと描けていた。

だが、核家族が進んだ現代社会においては、家庭のなかに薬箱があることすらもおぼつかず、「家庭薬」の明確なイメージは想像しづらい。それでは、そもそも「家庭薬」という言葉はいつから出てきたものなのだろう。わかかもと製薬株式会社牧田潔明会長によると、行政や法律面から見ると、はじめに家庭薬という言葉が登場したのは、1946（昭和21）年の厚生省

衛生局長通牒からだという。

当時の資料を見てみると、「医薬品でその成分、分量、剤形、用法、用量、効能等より見て、医薬品に関する専門的知識のない者に使用させることを主な目的とするのが適当と認められるものは、これを家庭薬として取扱うこと」（昭和21年6月27日厚生省衛生局長通牒）とある。つまり、一般市民が医師の指導なしで利用できる薬を「家庭薬」と定義づけたのだ。

法律面からみた家庭薬の定義は揺るがないとしても、一般的な心情からみると、法の定義をそのまま家庭薬の定義に一致させるのには、違和感を持ってしまふ。「伝統」「信頼」「身近」「安心」「薬草」など、家庭薬が持つ特有のキーワードがすっぽりと抜け落ちてし

まっていると感じるからだ。

それでは、現代人が納得するような家庭薬の定義は可能なのだろうか。株式会社龍角散の藤井隆太社長は、家庭薬の特徴である「多様性」が、定義づけを難しくしているのだと指摘する。

「家庭薬は多様な力テゴリーのなかで、競争力を持ったオンリーワン商品の集合体と言えます。それぞれ

の商品に圧倒的な特徴があるために、それらをまとめて一つに定義することは、多様性ゆえに困難なことなのです」

それでも牧田氏は、家庭薬を定義づけるキーワードとして、「ブランド」という言葉あげた。長年にわたって培ってきたブランド力があるからこそ家庭薬と言えるのだ。

